

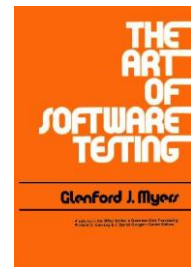
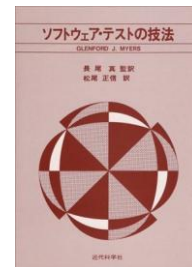
「100人のプロが選んだソフトウェア開発の名著・君のために選んだ1冊」 寄稿  
デブサミ 10周年記念書籍, 翔泳社, 2012

## ソフトウェアテストにはライフワークの価値がある

辰巳敬三が

テスト担当チームに配属された新人さんに贈りたい1冊

ソフトウェア・テストの技法 (The Art of Software Testing)



ソフトウェアのテストを担当している部署に配属になったと聞きました。あなたはずっとプログラム開発に興味をもっていただいていたようなので、少し戸惑っているのではないかと思います。

開発したいとかいろいろ希望があるかもしれませんが、ここはひとつ腹をくくって、まずは担当になった仕事を究めるという気持ちで取り組むべしというのが人生の先輩としてのアドバイスです。ついては、私にソフトウェアテストの理屈を教え、面白さや興味をかきたててくれた本を紹介しましょう。決して「テストなんて」と見くびらないでください。

私は30数年前に就職してソフトウェア検査部門に配属となり、先輩の見よう見まねでテスト項目をつくることからスタートしました。この本に出会ったのは、それなりにテストや品質評価の業務ができるようになった頃です。そう、この本は今から30年以上前の1979年に書かれたものです。でも今でも内容は古くなっていません。実はこの本、驚くことに25年もたった2004年に2版が出版されました(最近3版が出たようです)が、1版の記述はほとんどそのまま新しい章が追加されただけだったので更に驚きました。元々それだけ素晴らしい本だったということでしょう。

この本を読んでこれまで経験的にやっていたことが同値分割や限界値分析などの技法として説明されているのを知り、自分たちのテストのやり方の裏付けを得たような気がしたものでした。今思うと暗黙知が形式知化されていたということかもしれません。ブラックボックステストやホワイトボックステストという用語もこのとき初めて知ったように思います。

原因結果グラフという技法があることを知ったのもこの本です。1984年頃に日立製作所が原因結果グラフからテスト項目を作成するツールAGENTを開発していることを日立評論で読んだときには論理的でスマートな方法に憧れの念を覚えました。その後、自分たちもテスト要因の分析や直交表ベースの組合せを支援するATAFというテスト項目設計支援システムを開発しましたが、この憧れが開発のモチベーションのひとつであったことは確かです。

技法の話しをしましたが、この本は単なるテスト技法の解説書ではありません。後に数多く引用される「三角形の判定問題」や心理学の観点から示された「テストとはエラーを見つけるつもりでプログラムを実行する過程である」というテストの定義、「自分たちのプログラムをテストしてはいけない」などのテストの原則はすべてこの本が出处です。また、経済学の観点から投資対効果の最大化、すなわち限られたテストで検出できるエラー数を最大にすることを目的にきちん

とテストを設計すべきであると書かれています。そうです、プログラム開発と同じようにテストにも「設計」があるのです。そしてこれらのことが書かれている 2 章を著者のマイヤーズは「テストは、ひじょうに創造的であり、知的に挑戦しがいのある仕事である」と結んでいます。

最初に書いたように私は入社後すぐに検査部門に配属されたので本格的なプログラム開発の経験はありません。検査部門ではテスト結果に基づいて製品の出荷判定を行うのですが、その過程ではバグレポートや品質指摘といった開発部門とやりあう場面があります。正直言うと、私は開発経験のなさから開発部門に対するコンプレックスをもっていました。しかし、テストや品質評価に関する技術を学ぶ中でそういう気持ちが薄れ、さらにソフトウェア工学全般に学ぶ範囲を拡げることである程度払拭できたように思います。私はテストや検査という分野はソフトウェア工学や開発全般を見渡すにはよいポジションであり、よいスタートラインだと考えています。

今、私はテスト業務については現役ではありませんが、テストや品質のコミュニティの活動を通じて引き続きソフトウェアテストの分野を究めていきたいと思っています。

繰り返しになりますが、私はやはりまずは担当になった仕事を究めるという気持ちが大切だと思います。これはどの世界に行っても同じです。是非、自分なりの確固たる技術を身につける(プロになる)ことを目指してください。